大津可豆濤　上

2
281
1

金鉄肝

金子

門 ホ2-2
號 281
巻 1

手束杖の序

いにしへの歌よむ人のまなひのたすけとなり
このかたに傳へつゑをこきあつめ給ふ
よはきを石のてまへいはきつ秋と
此みのおこりしは春もおりのまゝ
あやしはしまゐるをまなひのあゆく

たゞあ世重直も芳ぬきを吉田
長興の子ハなふ波多野なとし
あしなも正清せまて古き事どもハふ
も文なりし園のさし花の若
へつてあふ重のこゝ重ねなあつめて
未来枝をなん名つけし続くることを

おのまゝをも見てよくあらは重ハ初心の
ひとき人々ハ以前しきつゝもおもむきした
かたハいまた人の教へなさるべきと
あらハおのづからに説明さし重て解ふ
ゐる事のしるしとき枝にかなふあり
以て世ゐること枝になりし まゐらて本性

ふけむとあるはなむへいなるか
たえていはゞ我ら作いさかはかく
なんかのふたち田氏とあなし

安濃津の采人　高橋知周

たゞしぬ身はしもちゐやちゐる神代(カミヨ)紀にひ
津かの日可の理郷の法く天下(アメノシモ)のむかの婦人
まはこ人ゆのくみちこくるりの氣かいさ
かもなし給くいとうるかちきのあるり
輕島(カルシマ)の明宮(アカリノミヤ)の御宇(アメノシタシロシメシヽ)大御(オホミ)代(ヨ)に代國(アタシクニ)乃よめの
あゆきもく我身津の文にやくよう門
名ゆ手あらふにのゆゆきゝ乃みられ了
三論ほとくのくゆゝはしまちゝ万
とはなのふくめのしのはあれとのけまつを
子しちよ　皇(スメラ)御(ミ)國(クニ)の道(ミチ)のいふちかれ讀
露(ツユ)うちよなも古語あの物語乎万
そふみのこ葉かく那へきもうなる理むゝ

世の人をしへすゝめむとはなくて詞をしるさむとて
松坂の翁がいはれし言葉を今さらに
しるしおきて翁がことなれば古言学
びの人のやくにたゝむとて（?）其まゝ
信のまゝしるしおくなり（?）其の
津の国の中川のほとりに翁がもとにて
不流の人々のまとひ（?）のなかにかきつけてなむ
あるのみ

寺田長興

一　すゞの屋翁と松坂人ゞ[illegible]

[illegible]

水の沼あまて氷酒を食臥とかけて無名轉といふ冠すへしやまと
説文に耕押のみれ杉しまて清てしの字酒をいふ乃其ま総をにと
いふを説にあなし神功の杉ほんすあまんをせとえゆきには
杉玄の假字を出わてゝゐ総乃とよし古事記に此れをあにぞあ
まんのけゝゐその此おほ樫法則をいたゝる人まてく人を
し河出てあをふ者しとい一ヘすき出まをゝよりすのかなすへ出しを
あくいはんにいよをまれ子れと初字のましそんにとゝいさきらい
はんとん倭姫命世紀のこと氷酒乃諸鹿國のすゝるてひとい玄古
れかくりの忠心とかけてそんにも萬葉集のこと氷酒を押無名轉を
さくも押忠のみれ杉しなまことよとのあらゆるおほてふとのことを
日出十古氷酒平のふ釀醸君称之とくよい氷ることをしゆかくのらゝく
酒とふとのいさんを又醸なしゝ落押鑒し飲を及の往ゝの糟酒
酒とかれ押たゝしきの氏れを子いゝるあゆそれ押ゝゝるよ
いひゝけゝる彼忠山文押文のあ奥いふれも此語え犯冠辞考ま
するてゝ氷酒としいてゝ三輔三寶なにとゝ彼醸のかとゝゝめすへく
みといゝゐさゝいひきけゝゝとゝふてゆとのへゝ出ても氷酒をあ乃
ことまゝいひかけたる歟へしかくれをたゝん飲てふとなるいなし

かゝるとのわまゝてゝ本なくもあやしの記のそのことゝゝゐいとれそひ
なましれ人こゝろをえゝれえん人ありゝし河出てく杉まへ考は
のれ乃清としいふ重みてかけゆくにかしあれ東　勅撰の此ゝ識い
諸係ゐ書杉ほんとゝよになむおゐまゝそのゐゝ清れを云魂の哥をえく
きのれのとわなくい万葉集惟なれ記の者の家をやあ言はなすらあれのい
たきやとくなんすさし我
中着ゝのあらあなしきつの玄ゝてもかれを大の余ゝゐも杉ほくあゝを
まきやの氏なきむまい古その事を文選云繳云眇云あゝに詞の清き
彼気のあにゆ錯をて字ゝ字のそけ撫てふのなふい和名鈔撫河
をなふぬか彼とゝのすある數へ飯炊の時にすゝふい杉生の歌かく
らひい諸の延ゐゝれなゐいそれのあゐ此約云文源氏物語とさゝほひ一法
はゝほやうえゝたるまてゝちゝゐのたあさてゐのことのかゝの人ゝさ世乃
人といへゝらの重いよあいゝゝそや杉まはまいのうまゝに徳しゝそ乃
ゆゑよしあよわあ河
あゝそれゝゝるよい通をかのきんのよれかゝゝかくへゝゝ文給ををく
をふまゝえあゝ忘しくかゐはあ河ゝる事とのしあれをかくゝゝれる
おれとをしいゝてされたゝんいすをゝゝゝなゝゝへてゝ

一 大乃のなにおほきく似たるをおほなれとちひさきをはこなれともいへるハなかれも
おほのかうへにさしはさみてあけます

一 堀江 涼江 入江なとの江ハえの仮字にて文 山路 通ひ路 若妻路なとの路ハ
ちとおなし山の井 石井の井ハゐとかけりハおなしくふれたるにおもふへきかきつ
らはしきふしもあるをなれたる文字をもちゐ

一 いみしうあやしうなとのうハくの音ひふのいおきいなとのいも音乃の
こゑのまうちふるやうとも書伝へしとそちかひなくこそあまたをくる
あるハ或かうハいふの音文らんしうハられしくいさゝかしうハいはちかえそ
なをよくいとおはえいつれもとなるくあけたるを書おこれなのそらは
あるをおきはしまれたまうふあり

一 れといふのやとよといふことは万葉集に伊等波延文 延久麻延と
なをまくえんハれえかく[illegible]ひも[illegible]のれ東[illegible]やつの
をしらさはす

一 不乃をなるしたる[illegible]あれをまと

一 をふたり
さふになしえて辞のたのへるはかの二云 ラ かうへ 草 麻
同文云 ラ かうのしは[illegible]文字のたのひくはしかれの

うけりゆくはとの三云 ホ とほし 書を日 傳云 ホ とほかけ
書を謝同五云 ホ とほきつる書を放[illegible]
[illegible]
あらん物学此侍りあらん[illegible]
まうすのよのハあるらうれしうまつり
文字書此仮字を雅云[illegible]
なかれ[illegible]
[illegible]記せり[illegible]
[illegible]古写の経乃州[illegible]文ハ古写乃[illegible]
世の[illegible]
まうそしるまこれ

一 世の[illegible]辞[illegible]人の冠辞[illegible]
懐ひな[illegible]
なれ[illegible]記せり
[illegible]人の[illegible]日の[illegible]
[illegible]辞[illegible]
[illegible]

一 これは歌の称も辞のこゝろをとりてまへにのせし又ハまことにひきて称を
むねとしてかゝけしもあれど後撰拾遺ひなとハちゝのうち
とりいでゝよみ人もしらぬなどはかきもらされたるもある
を今古今集に略せしひとつにまとめていにしへの
よみ人の心をとりて題をつけたるにまかせてたゞしあれとも
さらにむかしよりて一字二字をもその歌のうたによりてしるしをきぬ

一 このうへにかゝけたるもあるへし

一 歌よみは第一の巻の作者をもとゝしてよみ人の名ハ作者の部
なくてはかなはぬものなれはもとより作者の部にあけて作者名とする
したるは詞の第二の巻までのうちのよみ人の作者をあらはせるものゝ
いまの作と歌の名もならハしにはしめよりのうちにやとへてまいらするを
あけしるせりされとも人々のまことのおもひしりていかにもと見るへきもの
なるへし

弘化といふ元年九月稿を出しまてくはへる
しるすこれ道乃ために梓にのせしもちろの歌の名を
やのて歌の名とはなしけり

略字例

古 古事記	紀 日本書紀	續 続日本紀	續後 続日本後紀
三 三代実録	延 延喜式	拾 拾遺古語	旧 旧事紀
江 江家次第	和 和名抄	字 新撰字鏡	倭 倭姫命世記
公 公事根源	万 万葉集	八 八雲抄	禁 禁秘抄
古今 古今集	後 後撰集	拾 拾遺集	後拾 後拾遺集
金 金葉集	詞 詞花集	千 千載集	新古 新古今集
夫 夫木集	菅 菅家万葉集	催 催馬楽	栄 栄華物語
竹 竹取物語	宇 宇津保物語	源 源氏物語	狭 狭衣物語

伊 いせ物語
清 清少納言枕草子
情 情拾日記
盛 盛衰記
徒 徒然草
正 和字正濫抄

大 大和物語
今 今昔物語
保 保元物語
東 東鑑
著 著聞集
葉 和訓栞

住 住吉物語
宇 宇治拾遺物語
平 平治物語
続古 続古事談
色 色葉字類抄
栜 古云抄

落 落窪物語
土 土佐日記
平 平家物語
太 太平記
考 冠辞考
解 萬葉集略解

[illegible]

手束杖 上

い 初
ろ 十七
は 十七
に 十九
ほ 二十二
へ 二十七
と 二十五
ち 三十
り 三十二
ぬ 三十三
る
を 三十七
わ 卌
か 卌一

いの部
二言

多都可豆恵 上

いの部 以伊已異移怡易夷意 寐寝眠宿膽射 九訓之

二言

ロ いろ 万伊呂 色 ハ いは 万伊波 磐、岩 ホ

いほ 古伊本 廬、菴 ○ いほ 古伊布 五百 ヘ いへ

古伊幣 家 ト いと 和伊刀 糸 ○ いと 万伊等

痛、甚 チ いち 古伊知 市 リ いり 古伊理 入

○ いり 支 簄 捕魚の具入の義なるべし 近江言 またハえりともいへり ヌ いぬ

和以沼 犬 日本紀に恵沼とも見えたれとも犬宮を以奴乃太末比又猴を宇久奴以沼とよまれハいの仮字略しかれハ恵ハえの草の誤なるべし

手語らくての葉をあわ八家の飼をのかれて餌犬の義なるべしといへるはおもわれ有けまるあり ㋸ いぶ 字伊笛

熬 ○ いふ 和ニ絡を伊加ちとえ 籌 ㋕ いが 々 栗表皮之 刺

○ いの 和伊加 國之 伊賀 ○ いの 拾 栄 五十日 紀万ニ五十をいの

假字之用ゆ ○ いふ 字伊加 分虫之 烏賊 ㋵ いよ 和伊与 國之

伊豫 ㋟ いた 古伊多 常板を用ゆ 版 ㋡ いそ 万伊蘇

磯 ㋡ いつ 万伊都 何時 ○ いづ 古伊都 嚴

稜威 ○ いづ 和 國之 伊豆 古事記豆流の假字ニ用ゆ ㋤ いね 和ニ稲員

鳥を伊奈於保世度利 又いなおほせとり 稲 ○ いね 紀伊祢 寐 ㋣ いな 万

伊奈ふ 否 ㋶ いら 和伊良 小草そ生刺く 苛 ㋰ いむ 和

伊無 忌 ㋗ いく 和以久 生 ○ いく 古伊久 哉

○ いく 万伊加婆 ゆくとも 往、行 ○ いく 和伊久 長门 生衾

㋳ いや 万伊夜 彌 ㋬ いま 古伊麻 今 ㋘ い

け 古伊気 池 ㋫ いふ いはんいひいへるも 古伊布 言、謂、云

㋓ いえ いゆるも 栄ニ痛止の義とえ 枕用し 愈 ㋢ いで 續伊天 出

○ いで 紀異提 發語之 厭乞 ㋚ いざ 古伊奢 率

㋖ いき 古伊波 息 ㋱ いめ 万伊米 夢 ゆめといふ事 後の語なり

○ いめ 万射目 射部 ㋯ いか 和伊微 鳥之 鵤

㋯ いし 古伊斯 石 ○ いし 源倚子の書之 ㋪ い

上

ひ 紀伊比 飯○いひ 和伊比 械 ㋲ いも 古

伊毛 妹○いも 和伊毛 芋 ㋝ いせ 和伊世 國く

伊勢

三言

㋺ いろは 和伊呂波 母○いろせ 古伊呂勢 兄○

いろと 古伊呂杼 家貴○いろふ いろちん いろへるも

保入除の義なるべし くるの約ろく○いろこ 和伊呂古 頭垢 雲脂

㋩ いはほ 万伊波保 巖○いはひ いはへんいはひ いはへるも 万

伊波比 齋、祝○いばゆ いなゝく 和伊波由 嘶○い

はや 和伊波夜 石屋○いはむ 紀毛又満を訓の略なるべし 弥会

○いはひ 万伊波比 いはひ発語也 匍匐○いはれ 紀万大和 磐

余○いはみ 和伊波美 國く 石見 ㋭ いほり 和万

伊保里 廬 ㋣ いどむ 古伊杼美 桃○いとま 万

伊刀万 暇○いとこ 和伊刀古 又兄弟之子 從兄弟○

いとふ いとまんいとひ 万伊等布 厭○いとく 葉といと くの略

經と云ふ ㋠ いちめ 支市女の義○いちご 和伊知古 草く

覆盆子○いちひ 古伊知比 木く 赤檮○いちひ

和伊知比 草く 莔 いちひ 古書 ㋷ いちし 和伊里古

熬海鼠○いりこ 史 いとふなることよるもやすからず須磨のあまの いりまくるこゝろにいをきまえとまえ

古字未考 ○いりの 万伊里乃 山城 納野 ㋦ いぬゐ 多

乾 戌亥の義之 ○いぬる 万伊奴留 徃去 ○いぬゐ 多

寐を訓り ぬるいゑり ○いぬえ 和伊奴衣 草之 香薷 ㋠ いるこの

字伊留加 大魚之 鯙鮞 ㋚ いをの 和伊乎乃 越後 魚沼

㋻ いわし 和伊和之 魚之 鰯 ㋕ いがし 紀伊箇之 巌

○いがき 万伊垣 神籬之 齋籬 ○いかよ いくよ 万伊柯尓

如何○いかゞ 字伊加留 佷、忿怒 ○いかゞ 和

伊加之 筏、桴 ○いかた 和伊加太 艜 ○いかり 和

伊加里 碇○いひ 和伊加比 貽貝 ○いかゞ

多 籔を訓り 飯炊の 略語なるべし ○いかめ 万伊加伎 いかめ僻く 撥 ○

いの古 和伊加古 近江 伊香 ○いのち 和伊加乃 讃岐 生

野○いのほ 着陣のいろほをたてゝ きこえとまえ 古字未考 ㋵ いよく

万伊与々 孫 ㋞ いたる 古伊多流 至 ○いぶく 万

抱を訓り 臣之 うぶくともきこえ ○いたし 紀致を訓り 至の義之 ○いそぐ

久 万伊多 痛 ○いたむ 古伊多 互 痛手 ○

いたで 史 風のおとの河しほおひこゝろ いたそこれむねのうつ 痛切のことなれハ その痛手こゝろし ○

いたひ 和伊多比 木之 折傷木 字ゝ一云木蓮子 ○ いそぐ 多 氷蘊を訓り

上

○いたち 和伊多知 小獸之 鼬鼠 ○いぢち 和伊多知
播磨 迎達 ㋡いそふ 紀爭を訓り競ひの義なるべし ○い
そぎ 万己蕪伎 急 ○いそわ 丈 礒回の義也 ○い
そゐ 和伊曾為 信濃 笄井 ○いそふ 和伊曽布 丹波 石
生 ㋡いつく 紀齋を訓り 潔く忌を守れの義といふハいつくく 齋傳(イハヒカシヅク)の義なるべし
○いつき 万五十槻を訓り ○いづれ 万伊豆礼 何
○いつく いつくしも 古伊豆久 何変 ○いづち 万伊豆知
何路 ○いつる 和伊都留 出 弋 ○いづふ 万伊豆
流 お ○いづみ 丈 泉 和名の義也 ○いつく 仏足石歌

伊都々 子 ○いづみ 和伊都美 國之 和泉 ○いづも
和伊豆毛 國之 出雲 ○いつか 和伊都加 伯耆 者度
㋤いなむ 續伊奈牟 後 辭 ○いなせ 後撰 辞退の義也
○いなみ 和伊奈美 播ナ 印南 ○いなべ 和伊奈倍 近江
引佐 ○いなほ 和伊奈保 武蔵 稲毛 ○いなは 和
伊奈八 國之 因幡 ㋶いらか 和伊良加 甍 ○いら
れ 源 被寄の義成へし ○いらへ 拾 いらふとも 應 入敢の義成へし 敢進為と注せり
○いらし 紀 儼を訓り 正く儼となり ㋰いむき 字 伊牟支 小斧也
蛄 ○いむみ 和伊牟美 筑前 生見 ㋒いうび 盛

手

優曇のきもく ○いよよか ときもく 樹頭の ㋨ いのふ 字
伊乃留 祈禱 ○いのち 古伊能知 命 ㋜ いく
ら 祠社等の幣之 ○いぐし 万五十串 齋串まく 祓串とも
○いぐち 和以久知 唇割之 兎鈌 ○いくり 古伊久理
海底の石と いふとあり 字未考 ○いくは 紀的を訓り ○いく
さ 紀軍又射を訓り 射(イク)箭(スサ)の義やとも 業之 ○いぐひ 和宇風古紀 伊具比 魚之 うの云
うくひの魚 名なるべし ○いくろ 万伊久陀 幣之 多の ○いく
は 和伊久波 淡路 育波 ○いくれ 和伊久礼 越後 勇禮
㋳ いやし 万伊夜之 卑賤 ㋮ いまうご 古伊麻陀

未 ○いまだ 古伊麻須 在 ○いまくし 万伊麻思
你、汝 ○いまし 紀乃を訓り 正之 いなはちのこととも ○いまがわ
東 侍中群要今木住奉仕之節湯殿人所着衣之とも 禁秘抄平家物語湯巻ともいゆまきといへるもあり ㋘ い
けん 和伊介須 魚養之 簗 ㋫ いふわ 紀安忍を訓り 正之ん 強く
情なくあしまとらるるとも 今かやりをかくいへるものあり ㋓ いふ いふけん いふらひ いふへ ならんも 息
息生の義 なるべし ○いふき 万伊許藝 いふ発語之 漕 ○いぶじ
万伊許 自いふ発語之 楫 ㋢ いでは 和以天波 出羽 國之 ㋚ いざ
ら 万伊射 里 漁 礒のりの義とも そのの絡さく ○いざわ 古伊佐 紀 血
泣 ○いさち 和伊佐 古 砂 ○いさし 先 いふ発語 少

○いさを 紀 長又驍師を訓り 桀、勇男の義なり ○いさむ 字 伊佐牟
詢、諫 ○いさみ 万 伊佐美 勇 ○いさな 字 伊佐留
笏 いハ発語遙(スカル)の義之にの約 さるへ今さるまのきいハ也なり ○いさり 和 伊佐万 上野 伊
参 ○いちは 和 伊佐波 甲斐 石和 ㋖ いちに 和 伊木
須 海菜之 海髪 ○いそう 良 類鸛を訓り 息切の略語なるへし ㋓ い
ゆそ 万 射行 いハ発語也 往 ㋯ いみな 字 伊弥気 諱 ㋯ い
しく 今 継之いししくの略語ならん ○いしく 先いししくの略語成へし ○
いしき 紀 石槨を訓り ○いしと 和 伊之太 筑前 石田
㋪ いびそ 字 伊比支 鼾 息音の義之 ○いびら 和 伊保

良馬なるへし 杏葉 ○いひぼ 和 以比保又以宇宋佳 手足過之忽生如豆麁強於肉之うちえ精之いひぼと
いほ又いをめハいきのめなるへし 肬又疣 ○いひほ 和 伊比保 播广 揖保 ○
いひ乃 和 伊比乃 安芸 入農 ㋲ いもひ 宋 齋食の義成へし
㋜ いとふ 多 鳥之 鳴 玉篇に如 鸛とえ

い云

㋺ いろくづ 和 伊呂久都 鱗 ㋩ いはゆる 多 所謂
○いはぐみ 和 伊波久美 いまあけなる 巻柏 ○いはぐえ 万 伊波
久敷 岩崩 ○いはむや 多 後 況、矧 言之辛の義なり ○いは
以下不 万 不床を訓り ㋥ いましへ 万 伊尓之敝 古

(へ)いへども 紀 易倍迺毛 雖 ○ いへばやと 字 伊倍波也 集之

鵬 ○ いへまれ 和伊倍仁礼 草之 兇葵 ○ いへづやと

万家畏を 訓り (下) いとなむ 字 真久利以 也奈牟 営 ○ いと

をし イトオシ 甚 愛の 並之 ○ いとゆふ 文 遊絲を訓り まちの蔵之 ○ い

とくるふ 多 綟を訓り 条 繰の並之 ○ いとまなく 文 無暇の 略語之 ○

いとほし 源 うとましき いとほしくあり ○ いとまなし 字 伊也奈志 偬

○ いとけち 多 縁を訓り (チ) いちぐら 和 伊知久良 正市倉とえ

肆 ○ いちしば 万 櫟柴を 訓り 字 櫟を一比 乃木とえ ○ いち

やと 多 圓を訓り ○ いちびる 多 蕁をいちびる 草之

(リ) いりゝのせ 字 伊利加世 嵓々 今ゆるらせ とまりにあり ○ いりあひ

拾入相まて日の 沼入頃をいふ ○ いりもの 和伊利毛乃 肉臛之 騰 ○ い

りむぎ 多 麰を訓り (ヌ) いぬたぐ 和以奴多天 草之 紅

草 (ル) いをとり 和以乎止利 漁子 ○ いをすゞ

和伊宇須伎 草之 高陸 (カ) いかづち 和伊加豆知 雷 ○

いかるが 字 伊加留加 鳥之 鶍 鵤 ○ いかゞみ 多 盡を訓り

○ いのまふ 万 伊往還 以六 番語之 通 ○ いのまし 宗 威猛 多 を訓り

(ヨ) いよゝか 字 伊与々加 木長良 森々 (タ) いたゞき 和 伊多

多波 山頂之 巔 ○ いたゞき 万 伊多多伎 頂戴 ○ いたゞ

ら　万伊多豆良　徒　○　いたづら事　捨　労　痛字看の略なるべし

○　いたはし　万伊多波斯　労　○　いたどり　万伊多度利

いは発語之　蹁　○　いたづき　和以太都伎　今戯射箭之　平題箭　○

いたいけ　盛　痛気の翁之　○　いたどり　和伊太止利　草之　虎

杖　㋹　いれひも　古今　内紐の翁之　緒之蝶結雄紐との合しく　むすふ乃気なりとそ

㋞　いそがひ　万　磯貝　解之　鰒之ようるもの　殻の見ゆるのみ　○　いそがし　源

枌之いそくの例　勤も同じことそ　○　いそばく　万伊波久　蕪　解之　勤とふるを悲し　古は事の見るもとも云

え事はいそふいそひあそ訓れを　おのくなるべし　○　いそどり　字伊曽止利　鷸

㋡　いつまで　字伊豆波當　鴴　○　いづかり　万伊豆我里　解之

いは発語清かれ　かりくさかる　○　いかきさ　新古　何将の翁之　㋣　いなづ

乃　和伊奈豆　電　○　いなづび　和伊奈比　粒

㋶　いらつこ　紀　郎子　文　娘子を訓り　某こそ子の翁つは聴くとそ　○　いらくさ

多背を訓り今　いら川とも通し　○　いらなく　大無背の翁にも　○　いら

むし　字伊良虫　蝋　○　いらぐち　いらくさも　多　羊桃を訓り

㋰　いむかひ　万　射向　或人いふく　いは発語向ふと　○　いむあし　紀　戒を訓り

忌云の翁之　㋷　いくはく　古今　幾許の　約諾も　○　いくしほ　史

そ入八しほの翁之　㋳　いやちこ　和伊耶知　掲焉　○　いやま

し　新古　弥益の　㋦　いましめ　盛　戒を訓り　今忌の翁之

㋘いけにへ 和伊計仁倍 犧牲饌 ○いけどり 万生取

膚 ㋫ いぶせし 万移世勢気 鬱悒 いふせしとは伏之情に 気吹ありといふ 栞同

○いぶすき 和伊夫須伎 薩广 揖宿 ㋙ いこよみ 紀

岐嶷を訓り ○いこよかる 多 齋竃を 訓り ○いこの

ふ 古伊基能布 [redacted] ㋚ いざなひ いさなひとも いさなふとも

万伊射奈比 誘 ○いさをし 紀 功勲を訓り 栞にいさをしと いふ 非なるべし

既あれにいさをきていさをしは猛きといふを略せるなり 栞に勇雄(イサヲ) 之義(ミキ)とあるは出所を知らず ○いさく

め 万伊佐々米 率尓 ○いぢよふ いさよふとも いさよひ いさよへるとも 万伊佐

用布 猶預 ○いさよふ 万伊佐々可 聊 ㊀ いさいの

栞聊にいさかひ いさゝか ○いさゝお 源いさゝおにいさゝかなし

字伊佐々古 鯆 ㋖ いさゞめ 万息気息嘯の 伎 気之 ○

いさなを 万気緒 息の緒に 伎 ○いさほひ 去 勢を 訓り

杯に息 競ふ ○いさくはひ 和伊佐之佐 草之 景天 ㋯ いさみ

さ 峡 磋 ○ いしきり 和伊之須恵 ㋠ いしぞき 字石口之 鏕 ○ いし

いしわ 和伊之須恵 磋 ○いしぶくし 先 碑を訓り 石文の義之

いしのちち 和以之乃知 鐘乳 ○ いしもち 和伊之毛知 魚之

鰺 ○ いしぶし 和伊師布之 魚之 鮔 ○ いしがめ 和

伊之加米 山中魚之 秦龜 ○ いしうら 万石占を 訓り 紀景行天皇十二年天皇初

將討賊次于柏峽大野其野有石長六尺廣三尺厚一尺五寸天皇祈之曰朕得滅土蜘蛛者將蹶茲石如柏葉而擧焉因蹶之則如柏上於大虛こゝをいしはしへかゝるところなり

ゑし まちひへ ○いしばし 和以之波之 矼 ○いしぶし

和以之波比 石灰 ㋪ いひぼよ 字伊比止与 鵙之 ○い

ひあり 和伊比阿里 出之 赤蟻 ○いひむろ 後撰集 飯室

乃名 まや ○いひしろ 和以比之呂 まと江 邑代 ㋲ いもうと

和伊毛字也 妹 ○いもがさ 栄 皰瘡 和名裳瘡 いもの異名なるべし

○いもがら 和伊毛加良 芋莖 ○いもがゆ 字和以毛加由

署預粥 ㋜ いすゞ 古伊須々 彼 いにしへ発語にてすゞなるべし

五云

㋩ いはしみづ 古今 石清水 万ゝ石をいはと訓り ゝゝの二字と書り ○いは

たおび 齋肌 帯の名にて懐妊の女帯ゆふをいふなり ○いはつゝじ もちつゝじとも 和以波

豆々之木之 羊躑躅 ○いはほすげ 万石穂菅 巌菅の名也

○いはのかは 和以波乃加波 いはのかはともいへり 石韋 ○いはくゞり

和以波久須利 草之 石斛 ○いはひばら 万伊波比 齋 嬬 妻

の名 ○いはゐづら 万伊波為都良 石居蔓の名なるべし ○いは

ひづら 万伊波比都良 以蔓 延蔓の名なるべし ○いはばしる 万 枕

訓り 石走を ○いはそゝぐ 万以播區 枕耶輪 石崩 ○いは

ほなの 万石綱乃 考ゝ石蘿と書り ㋭ いほへなみ 万五

百重浪 ○いぼむしり 和伊保無之利 蟷螂

㊇いへいも 和以閉以毛 芋 ○いへつどり 万家鳥

を訓り 鶏を いへり ㊦いとけなし 源 幼稚を訓り 稚くいとけなくとをいへるにや

のこし 鮮 いかき 乃 ○いそのかみ 万伊等乃 解に いとけなし 倚 いたく

志字 末考 ㊈いちしろく 万伊知之路之 灼然 ○いちはや

く 延 一速 比 厳捷 ○いちぶかる 先 市 場の 意に い

ぬじもの 万伊奴時 能 鹿児じ物 の あひて ○いぬつひ 山 字 犬和 良比

草え 狗脊 ○いぬのしり 多 和 粒を 訓り ㊁いるさ

乃 万 所射宍 考て 所射鹿 の 意 ㊄いちのふえ 和 伊乎 乃布

江 魚腹中 腯え 腯 ㋻いわけなき 狭 幼稚を訓り 言別 着 の 意え

○いわけたる 源 いとけなきの 通 ㋕いのはかり 古今 何

計 ○いのはまま 万何方を 訓り ㋐いくやぐし 古

痈 矢串 ○いくちぐち いくちも 和以多知 々佐 連翩

㋡いそのみ 和伊曽乃加美 石上 ○いそがはし

急くより出る かはし 八雑 にいそがし 同 ㋡いそくし 万 古斎島 今巌島 とのこと

○いづてふね 先 巌手船の 意 ○いづくしむ 万 愛を 訓り

いつくしむ 同し ㋤いねのかひ 多 稼を訓り ㋤いなひの

里 和以奈比加里 いなつるひとも 電 ○いなむしろ 万 稲莚を 訓り ○

いなごまろ　和以奈古万呂　虫之　蚱蜢　㋶　いらなけく　古

伊良那祁之　哥嘆の訓之　○　いらつひめ　紀以良都比咩　郎姫

㋺　いくちごも　又軍を訓り　㋳　いやしくも　之　苟を訓り　雖

綫の縁よりおこる之異之称なり　○　いやいとこ　和伊夜伊刀古　従父兄弟　再従兄弟

㋣　いまゐがわ　伊勢にいまゐけ在の義之けあの又かくしるり一説に時を云くしるしたまふ字なきに在の字を注せり

㋚　いさなとり　紀万異舎儺等利　枕　考に鯨魚取之とも云ふ非之事をいふ発語にて小魚取の義之文にはかくく

これよりさきの紀を信流漫録ちに不紀魚取之なりとしるされたり

少なの義之　○　いちはやし　紀潔を訓り　清しの義なり　勇　○　いさみ　紀水潦を訓り

しく又　痿癖を訓り　息機の義にて　○　いきどほる　万伊伎騰保流　憤　○　㋖　いきざし

いきみたま　二に紀生霊を訓り　㋱　いめたつ　万射　枕目

立而射都立而の義之　㋑　いしきしま　和以之波之波　牀　○

いしなとり　又投石を訓り　○　㋪　いひしたみ　和以比之多貝

箄　○　いひかはし　大宮交の義之　○　いひのしまる

饗　○　いひなぶらひ　万日気良比　宮瀬ひの略語之　㋲　いもろ

かもし　紀万妹門妹袖　なるを髪　枕妹手字妹髪　なそく　㋜　いすくはし　万　枕

伊須久　考に勇細なる心の義　波之　すくよかなり　○　いすろぎひ　万伊須呂　弥比

いい発語にてすくるるき心ひの約之

六三

上

(ホ)いほしろをゝ　万五百代　拾歩抄て七十二歩ナ為十代五十代為
小田　一段ことゝえ五百代ハ是なしるとゝえ

(ト)いとふのゝみ　史獸神ゝて狐狸の事をいふ
狼を神とゝるを紀て見えたり

かさ　和以知比乃加佐　櫟梂　(ヌ)いぬおらゝ歩ぐ　冬菻蕭を訓り　(チ)いちひ乃

○いぬのひほし　和以奴加比保之　牽牛　○いぬ乃た

まひ　和以奴乃夫末比　犬宮　(タ)いつゞいのはし　源　煩を訓り　栞といふ

(ツ)いつもみをな　万伊努藤　乃花　解ていつハ五百津て多きをいふなり

洗まよりし　とらあり

ひとえかくし　葉ゝ叢藻の類之　とらへるを指りいふなし

○いつをれとや　和以具波乃臭夜　癈家

(ナ)いなつ歩がよ　和注ニ稲春蟹見　正りし　(ク)いくはかまいろ

和伊久波土古路　射桀　(モ)いもせうとめ　和以毛之字刀久　姨

七云

(ハ)いはかきもみぢ　先岩垣紅葉の類之　(カ)いかのぼく　和伊多知波之加介　未之

ま　平　嚴物作の類之　(タ)いさちはじかみ　和以祢宜波古万呂出之　螽蟴

蔓椒　(ネ)いねはさまろ　和伊奈於保世度利　稲負鳥

(ナ)いなおほせどり

七云

ろ之部

○

ろゝはう　冬縁衫を官使て指訓り　六位の袍のこと

ろ乃部　呂侶路露稜骨盧廬樓漏

はの部 波破皺半判絆伴巴 播幡蟠薄八方 清音

二云

㋬はへ 和波閉 虫之 蠅 ㋡はげ まちぐさ 万波夏 恥 ㋫

〇はふ はんもひ まくるも 万波布 匍匐 〇はふ 活て活し 出なきあり

和波布 蝮行 〇はふ まへよ 万波布 延 草木文縄 なかくさもあり

㋓はえ 夕ちえ文 まえて出なきと 万 映を訓り 栄と栄の字を 訓もおせりとえ 〇

はえ まゆるも 草木之字 和波要 生萌 〇はえ 和波延 魚之

鮠 ㋛はじ 丈 黄櫨 もみぢこはなりと云 まへじえ合べくし 〇はじ 姓 續

氏族 土師 和に土師を波之といへ 埴師の略語なく

三云

㋑はいま 紀 驛を訓り 早馬の義也 やいまくり 〇はいやし 紀隼人を

訓りやひの約也 〇はいの 和波以可 淡波 羽床 〇はいろ 和

波伊多 淡波 林田 ㋩はそ 和波々曽 木之 柞楢 〇はゝ

か 和波々か 木之 朱櫻 〇はゝき 字波々伎 草之 荇蕣

〇はゝき 和波々 伎 箒 〇はゝこ 和波々古 草之 蓢

蒴 〇はゝき 和波々き 國之 伯耆 ㋥はにし 和波尓

之 木之 黄櫨 もじとのこも いふなり 〇はにふ 和波迩布 埴生

㊁はへき 和波閉岐又古流岐 ○ 棲 ㊀はりを 和波利宇

針魚 ㋕はかひ 万羽我比 鳥とあり 羽 ○ はおう 栄

八溝をも役ていふの ㋟はたく 和波太倍 膚 ○ はらち 拾

二十ち訓り行ふへちょうらう会法し ㋡はつえ 古今 極枝の 歌之 ○ は

つほ 延 初穂 三代実録に早穂二十文と まさわく銭をもいひし ○ はげこ 極 踏

の略成し ○ はげん 先 弛を訓り 紀 正月し ㋤はねび 万翼 酢 唐

棣花 ㋤はなぢ 和波奈 知 衄 ○ はなわ 文 塙を訓り

塙字書土堅而不可抜とあり又奥羽抜武蔵のそれとて山のさしおるなといふをもとわかち鼻田の歌よ浦田なわかとかけし

㋶はらへ 紀 祓具を波羅閇 都毛能とあり 祓 ○ はらひ もとはん もろふ

もとく 字波良 をなも 布 拂 ㋒はうし 今帽子の 歌之 ○ は

うし 源 柏子の歌之今 ひやうしともあり ㋖はゐふ 和波爲 留 斷

㋗はぐひ 和波久比 能宇 羽咋 ㋫はふり 和波布利 三聖

祝人 ○ はふき 和波布 容飾気之 白粉 ○ はふし

紀 儒を訓り 法師の 音におもえ ○ はふ黄 史 延樹の 歌之 ㋙はこ

え 清 袍の後の袋をいう 袴衣の歌なもし ㋛はじく 家々旅をと弓波 自るとある

彈 ○ はじめ 万波自 栄 初、始 ○ はぎて 字波 志々

齒所居之 腭 ㋪はひり 先 遠入の 略语

比云

上

㋑ はいたか 鷂を訓り正しく早鷹の義なりといへるハよろし ○ はいずみ 和

波伊須美 膠漆ノ具之 掃墨 ○ はいむら 和 波伊波良 藤江 蓁原

㋩ はくぐわ 和 波々久之里 草之 貝母 ○ はかみ 多

麦桃を訓り ○ はゞき 源 箒木 ○ はゝとひ 續

波々 母何の義なるべし赤子の慈母を慕ふのこゝろ ○ はゝ太

刀比 古くハ膝を物ひいふなるへん

我ゝ多 菴蘆子を訓り ○ はゝぶき 蕣 枡ては意富波美袁斯 麻尓波支良婆よろし

ふるき蕣も旋花といへるハ誤なるへしきうりを延てはふりといへるハ

かくしるしたるものありてさる説も見ゆれとさしあるへしかく辨しく

彼さ使あくいつれかきいふといへれと延えハはふりといそいへれ

古ハ延るの術と見えさるを延てきぬといそついく市をなすを背く

ものハ山阿なるを始め殺々なかれハよしとる物の孔あらくあめ粗き

ものをもけきと字ゆるにはあるもことしとも字ゆるとくとあらそのと

㊁

○ はゝそ 和 波々曽 今はしらぬといふ 柞子 ㊁ はまゆふ 和

波尓和利 羊月 注一云謂其體男而柔男下略 ○ はまぐふ 和 波尓太布

匜 ㊬ はへとり 和 波倍度利 似蜘蛛虫之 蠅虎 ○ はへ乃古 和

波牟乃古 胆 ㋠ はぢらふ 源 恥を延たり ㋷ はらゝ 和

波利 鍼 針管 ㋬ はらのあれ 和 波和 嘆れ 歴歯 ㋕ は

からふ きらゝはれ きらゝひ きらへるもの 紀謀を訓り 延じつる ㋡ はがし 万

波夏可之 恥 ○ はぢかし 和 波 多波良 阿波 蓁原 ○ は

ぢのし 和 波夏安之 山城 羽束 ㋣ はなぢら 宇波奈夏良 牛

糜 ○ はながそ 多 靴を訓り ㋜ きらゝひ 和 波良

於比 腹帯 ○ はらわた 和波良和太 大腸 ○ はらば

ふ 万腹婆 布 匍匐をいふなり ㋰ はむざは 和波牟佐波 武蔵 榛澤

㋒ はうもち 栄賓物の 未之 ㋬ はまゆふ 万濱木綿

木綿ゆの二云にあり ○ はまをぎ 万濱荻 荻八杏の二云にあり ○ はま

はひ 和波末波非 木之 蔓荊 ㋫ はふその 和波布曾能 山城

祝園 ㋯ はじゆみ 古波士弓 櫨弓 ○ はしのみ

古波士加美 薑 ㋪ はひのぎ 字波比乃木 檉 ㋷ はせを

ば 古今 和、發勢乎波 芭蕉 蕉せをの字あやまりてはせをとなるべし

五云

㋩ はゝそば乃 万波々蘊葉乃 考に柞葉ぞといふなり ○ はゝきぼ

し 和波々木保之 彗星 ㋬ はへはらひ 和波閉波良比 僧坊などにあり 白

拂 ㋟ はたおりめ 和波太於利米 虫也 促織 ○ はた

すゝき 紀 旗芒を訓よみ 薄の穂芒の思ふべし ㋡ はぐろひ 和波久呂比 久呂

比 啟 ㋥ はなのかづら 万葉 縵 根解に少女の髪の飾になる物といふなり

㋤ はなえむ 添 宴 ○ はなぐはし 万花細

かくはしみの 和之 ㋶ はらゝふえ 和波良乃布江 大角 征戦之

㋒ はうちやう 宇 庖丁 ㋗ はくわかう 古今 百和香の

まなく ㋬ はまくづら 万濱葛を訓り ㋫ はふほぎ乃 万

延蔦を訓す ㊁ はしむのふ 枕 万 著向 考ニ著ハ縦之向ハむつしきをいふといへ

○ はしまほひ 平家 黄櫨 白そ 色目ニ云ふ ㊀ はひまゆみ 和

波比末由美 木之 杜仲

六言

㊄ はちのをひ 和 波知乃須 波比 苔 ㊆ はちをり

むし 拾 促織虫 ㊅ はしやうまゐ 今 放生會の 青之

㊂ はむやのをぢ 源 蟲姑射刀自 左虫の名といふ ㊁ はじかみいを

和 波之加美 以乎 鰻鱺

七言

㊀ はかまれむし 和 波加利乃 於毛之 權衡 ㊁ はひ

もしほろふ 古 波比毛呂 富呂布 匍纏

に乃部

爾伱迩二仁而耳珥貳尼柔

二言

㊇ にはは 和 仁波 庭 万ニ 演之の辭 なるをいふ ㊅ にほ 和 尓保 鳥之

鸊鷉 ㊃ にへ 和 仁倍 魚之 鯢 ○ にへ 和 尓倍

苞苴 賕、贄 ㊂ にふ 和 尓布 大和 丹生 ○ にふ 和

和布 生江 壬生 ㊁ にえ 煮を訓す にゆるをいふ ㊂ にじ 和

糸之虹 ㋪ まひ 万糸比 新

三言

㋑ まいさ 和糸伊多 物毛 仁多 ㋩ まはそ まひそう 和糸波

曾草之 甘遂 ○ まはお 万糸波可 儀 ○ まはび

和迩波比 燎 ㋭ まほひ まほそん まほへまう まほよ 万糸保比 艶、

白、婢嬡 ○ まほろ 万今舟を訓う 三の活え ㋬ まへさ 紀甚を訓う

紫之肥後風土記之俗見多物而云糸信佐糸今訛歟 魚甚此多有可謂糸信魚ことあのことえといるう ㋕ まかは 和糸加波

膠 ㋵ まよひ 辰 なまひとはし なりまでう ㋤ まなり 大無枕の毛

佼之 ○ まなひ まなそん まなのへ 糸う まなよ 万糸奈比 荷

㋨ まのを 万荷之緒を訓う ○ まれほ 万冊之穂を訓う

㋐ まあふ 狭似相の遂 ㋛ まじふ 字之蹈を不弥 糸志由とえ

㋪ まひも 万新裳を訓う ○ まひせ 和糸比世 偽井 庭妹

㋜ まばわ 古舟欄之月之えう

四言

㋩ まはくち 和迩波之佐 草之 地膚 ○ まはげく 和仁波 互々

虫之 地膽 ○ まはなひ 紀新嘗を訓う まひなくと同し ㋭ まほ

てらふ 鳴照 中古よりこれことにてふ枕詞といへり 紫之鵜鶿照の字 まや中昔てふ新波了恐照といふの赤しといへるハじく

精しからんとも恐照又級照なりといふも守ゆれと鵜鶿てるとふことといふ まろもまでのことし考ふも老乳照押照の語の例よりいふもくといへるふハ

ことゆゑるはひきてしくるの梅のえだふりにしへのりはふ辞とあられぬめく
神功の御前に彼湖に渡らせ給ふてけりひしくには志のあるをえ貴ゆきたる
なれと鷸鷸の湖にふりかるとなるらんとてれを聡き備にきて御運てふかな
ふへし涼れの約てそさる辞をてまふにならん万葉に長奇に嘆に保
鳥能布多利郡良眠爲伽多良比斯とくなすのとはにある雌雄を取れぬさ女
のりたし詳らが考ふるに葉に逆保ノ郷とすれをまる湖にふ気あるらんぞ
いまそらはしひさえまり逆保をはいのまるらん詳らにたはやるく人のしられさる
許をとりてはるるにはひ考あるもあられまるかくへ人の名気のかなくの湖乃
気もしもなかくまで理の
あらさなそてたまへ

㋵ まとのう志 源女御をき 景行紀にいへり

㋡ まほらふ 万冊頬布 きまりにふとももちり ○ まほらじ 和仁 きそうつじとふ

豆々之木之 蔄芋 ○ まほのふ 万冊津波布 解冊着を延にあり見

㋒ まとだり 景入道の書 ㋔ ま杉をひ 和迩旅母比 はそりあり

猿 ㋗ まくさひ 吏位 あきひそかくへの名るなすはのく 船の門なくにらしてあそれ

志字未考 ㋫ まふのは 和爾布加波 越中 新川 ㋖ ま茂

たへ 語爾波多 信 和衣 ○ ま茂とひ布古 綴

多言まゆるほしと 杉おかし ㋪ まひなべ 古爾比那閉 新嘗 ○

まひろの 和爾比乃呂 濱波 新居

五言 ○

㋩ まはりどわ 古爾波都宮理 門に助辞之 鶏 ○ まはれそ

ら 和爾波佐久良 朱之 朱櫻 ○ まはくぐ孫 字爾波久 久孫

草之 華 ○ まはたりみ 万爾波多 豆之 潦 ㋵ ま

まりばり 年家 堅 女房 ㋒ まりの加ゆ 和爾宇乃 加様

六云

略(キ)まなはし 宇仁支波々賑 まなむひてけし 之

(ヒ)まひまくはち 和仁氏万久佐 わさわきまくらち 草之 蔄茹

六云

(八)まはくれぶす 和不波久奈布祀 をきて 鶺鴒 (ホ)まほ

をねばな 新後撰集 不香花をさしとろう ○ まほきてきぬ 万丹穂之為衣

解之まほをきし 衣とことろう (ノ)ま乃ほ比枝ち 万丹穂面 解て紅顔をふことろう

(フ)まふ乃まそほ 史新古猪の 袞之 (ヒ)まひたまくろう

万新手枕を 仰す

ほの部

二云

三云

ほ乃都 保瘻幸寶富明 覺報譜宸善国 九煩之 濁音

二云

(イ)ほい 源布衣の 袞之 ○ ほい 源朱 袞之 (ホ)

ほく 和保々 頬 (ヘ)ほへ 紀膿 縹火 (エ)ほえ

ほゆる 和保由 嘷へ吠 柳こほゆるとさ仍之

三云

(イ)ほける 和保伊多 穂北 (カ)ほがひ 紀 壽を刈

保むの延之 ○ ほおひ 年 行器を刈り ... (ツ)ほそ

じ 和保え之 草之 白英 ○ ほそち 和保そ 熟瓜

四云

(ロ)ほげえ 古事記延 朱枝 (メ)ほのか 萬葉 焔 火の

秀の歌く (キ)ほまちじ 史 葉々岸険をほ しかりちほ除道の歌や (ミ)ほしひ

字保志比 かれいひとも 糒 ○ ほじて 和保之々 乾肉之 脯 (ス)ほしひ

字保須比 爊

四云

(ホ)ほうけ 和保々須今 ほいうけとも 縷 ○ ほうまふ 万保々 ほうむとも

麻例 等 薊 字之保々年佳 [illegible] ○ ほうてふ 和保々天布 蝶之

鳳蝶 ○ ほうむ 源 正之斂咲を注せり 含咲 又類咲まてあるべし ○ ほう

ほうき 和保々支彼 かほうきとも 面子 ○ ほうずき 和保々支彼 酸

糅? (ト)ほとほり 紀火熱を訓り火通の歌く保ほとほりとも ○ ほぐし

ほぐら 和保土久良 庫之 百部 ○ ほぐらひ 著 祝をとらひ ひは辞之

(ヌ)ほとくび 字保太之比 火鎚木之 爐 (ツ)ほそわる 和保々

和多 小腸 ○ ほそくづ 和保曽久為 爊 ○ ほそ

乃を 紀臍を訓り御の 緒の祝親之 (ウ)ほう奄は 塞 奉幣の 事之

○ ほうれむ 盛鳳輦の 事之 (フ)ほふまう 保 法皇の 御之旅鉢?

のちとこ天皇を 称しなる (ユ)ほおろへ 万富己呂 侍 ひろう 謗を延 (ミ)ほうし

あひ 文 星道の歌之 七夕には寄 ○ ほしいを 和保之以宇 乾魚之 鱐

○ ほしいひ 和保之以比 乾飯之 糒

五云

㊭ ほゝがしは 和保々加之波 木之 厚朴 丈之 ほゝの木とも云ハ非也 ほゝの木ともいふ

㋕ ほゝひげ 和保加比 々止 乞索児

紀 恣又檀を所り 字ほゝ 保志支万ホ万ホよえいさまり

○ ほしめゞる 丈 紀之 令

貪嗜をほしめかなましむ とぃいかあれ

六云

○ ほしもじかみ 和保之波之 乾薑 加良

十一云

○ ほゝしまろむじの清めさ 和保字之万良比 刀乃良加佐 玄蕃寮

玄之云蕃ハ係ゝ蕃客を接待の處なる事なれバ中略ほゝしハ白
布紀之係の字を保ゝしと訓せるハ法師の事なるを和訓とせられ
えて法ハ入声なれバ漢音ハほふ呉音ハほふなれバほふしとよみてむかし
とほふしとよミしを係之係ちて文字を略て韻をうしなはれしふの音にあらず
韻のことを申すやうよりの梅につけのかへいさらるゝえなし係之係ち
あらぬことをするやゝやハあるやハすがと清のおれ保布を保字と注するハ
和名抄のあやまりくけもハおかしきの法則としるべきなれハさるとおもふ
つまやうなられと後にはよもすまさのあやまりなるんかゝるなるひ
かれあれえゆいて一ッ二ッいまん之河郡名寶飯を寶飫摂津々名撫本
をも穂の毛止とを江々名尾間を於萬甲斐々名川合をか波井なと
あれあれてみれ误なことゝ称ゝ字としされたらの世んあるいへらせんハ字を
ふへしかれ正の説考への添入なるへし今えぇ本のまんれあるしうるの
ゆゑてのしを
うらわかれ

二云　三云　四云

へ乃部

二云

㋣ へを 名 鷹之 綜緒を 訓り ㋒ へう 名 今 豹の表之 わこ奈加是

可是と えらるり

三云

㋑ へいし 盤瓶子 いせ平氏と 云かけたり ㋖ べたう 後撰

別當の 訓 例く ㋡ へきひ 神楽 云 竈 正知比

四云

㋡ へつらふ へつらふ へつらひ 字 反是良 へつらへる 不 諂諛 ○

五云　二云

へつらふ 万補 付経を 訓り

五云

○ べいしゆう 字 清經の 訓 例く

と乃部

二云

㋩ とは 古今 常盤の 墨 例く ㋬ とへ 名 十重を 訓り ㋠ と

ちゞ 鹿縫く とぢ まり 字 乃是 術 ○ とぢ 名 閉を 訓り 止知加太 年之 字二 図を とぢ まり

㋒ とう 後撰 最あはせてまゐりて女のもとにつかはしける 頭の 新ろしゆるし ㋔

数の文字をあて
假字のとるゝ一ヒト
二フタ三ミ四ヨ五イツ六ム
七ナ八ヤ九コ十トヲ
韻の文字を除け
ハやうゝかよりり
音のまゝかれを用
ゆるをもとゝ十
のおハ韻なることを
考ふべし

とを 十

古 登袁 採て十のかれを登袁とよめりこれも非之甚しき
紀 万日 古ゝ天津日継所知之登陀流天之御巣云ゝ

紀に景行天皇條に日本武尊妃吉備武彦女吉備穴戸武媛生武鼓王与十城別王（古写本又一本時別王と見）又万六ニ多将弥
登陀流八十足の義之万に百足らず八十隅坂 又五十足天日栖宮とも見ゆ 又十拳剱（トツカノツルギ） 紀日

十里（トリ）躡（フタ）立 くく 日書 ○ 纂者安禮十（トキ）方（ナ）くなる

とをハ数に正しき韻もなく十の假字とおなじと知るべし 是れて韻にハあらぬえ数の字

を注しゝるゝて古事記の例にかなへれもふ古事紀書紀式ハ古本備馬ゆ又知気耕

國々の郡々の名なとにも是れかれ物例たのゝとおもし先のる方に紀書紀万葉ふ

とゝもてあるハ代々久しくあれわりのをもとめて五十連音にみられし

ゆゑえよりかれハ後世古言式とかうくもとゝいふことよれるにはま

ふし数字の字ふ式畫長字音假字用格に古言にもおもて凍ふることぞ

あけ洋らひくちをおのこの是れよりやかりあらゝるしいふしまいさちと

ゑよりかれいさハ十のかれよ数をあらくゑらゝ法ふことゝら数あしるそ

とゝのなく用ゆるハ古言の例とのなくれ本をあちて例なるみ年古言ゝ

えは十の人を考ふべし 亦ふ和て針魚を波利乎文万ゝ人魂（ヒトダマ）乃佐青有公之云く

去れうの於なり ○ ある人問るゝく十をとゝのかれて用ゆれハおハ韻なることとおもふ

成よしいふよのゝとりし是れもらは古事記書紀万葉集等にもれてあれとちさと

のりあり〻とも数よき所にて行もなしさるは字太の書にも非なりかゆゑそ

すべくてのかれハよりとおゐることハたのしかりしかよや 是れ此しもさるいはれハなし

假字ハたゝいへる也をかむ古言ともにとおのゝ順にすゝべれと其千のゝのな

のさうゝのくるを義に論ふゆへことく代々久しくあるをおの假字五十連音と

みえれしゆゑに向考るれを古事記等撰定の頃たやく五十音ちの

あのしや委しくは流れといすくに今のまとゝく数を考へりくく代々ひれゝ

おしとのなくれ古き川頃古きもとてもみえし ハ寳りかれの頃数を考へるる

まくまゐをさせまらえれすくて古本とふふハいかれもわかりもあゝれれを

中古数を考へりしれをやゝ五十音を音て其数をえられし ゆゑかくことゝ

今代あまおもくとてそやよすゆらかくのとくゝのくゑ 問 たゝのとくゝをお

五十連音よみられしとハいはゞ音（オト）を祇面（オモ）をちゞる文字（モジ）をかの類（キサ）等

いのく 答 かれの諸本にゑあるれもともさのことく假字の洗おの本の

おのとゑえるへまれにたわくのかれいさゝろしたゝのうちとなく凡十ののかれのかなるハ

あのされを考ふ総数に析をまのとたゝのはさきゝふとらは数よおの於

童中のきやのにゆのれを皆おそるかゝされを五十を音をまでくも

きゞ数うのさゝすやうなのは總十のおハ韻をて能の音をそくハさゝれのにゆうえか

ゑゝされを以さ川にあるまと数中あれしかれハ古言にも韻の文字副るをむ

かれうにしもあゝうのみもつて今きくゑ本にはまゑる考ふべし是れを知ら

十の数も韻として考ふにしてをおのゝされしゝふんかんたゝのひくるまうに

あれのさまし給かくしゆゑかくなりの事すくなからぬ むねなくしまゐらせまゐらせとよ
そのゝれを浅くさく遠き山のいふさるのことし太子の古きをは尓わかるを
さて今の本の頭のおもくとさるし、それをくての額のごとしあれをと行う
たゝちくわれとなさきゝハなるほんをまはすれすてまゆるなりあるれハ
蚊の孔をはしれあらくてあをしとゑハすくての御もかなひいてもくの尾はの杉むる
そのなかしれや杉の礼かくいふゑれ京疑をしまふしのあしはかきこのとく古きを
さきまかへし
ゆるくおとろきを ㋞ とゞし 和 刀自 戸母 ㋪ とひ
とちん とふ 古斗比 同
とくるとも

と云

㋭ とほし 古宅保 斯 遠 ○ とほる 万等保 利 通

○ とほざく 万 遠音を 訓り ㋠ とぢめ 仝 結目を訓り 衍目の義く

㋷ とりゐ 和 鳥居 神門 ㋚ とさく 古登袁 々

挊 ㋦ とだえ 後拾遺後の 黒衍之 ㋡ とげぐ 重之集

違 今とぐくと いふ ㋤ となふ とをいふとも 万 刀奈布 唱 ㋒ とぐ

とじ 着童子の 青之 ㋨ とのゐ 文殿 浅の 義之 ○ との

い 万 侍宿 宿直 上て殿居 しるる八雅之 殿寝の義之 ○ とのへ 万

外重 かの方の 義之 ㋴ とおは 万 床磐 常磐之 けし

○ とふら 紀 但を訓り のうらはし 説きの義や ㋖ とまは 万

等役 波 常磐 ㋪ とひき 字刀比字 魚之 鰹 ㋲ ともえ

江 鞆 絵 柄之 今の 巴之とも

ち云

(ホ) とほひと 紀 長令人を訓り 之人の略語なるべし ○ とほづま

万葉 嫣 解に遠く浦する嫣をといふ いふ之嫣を知様にいふとぞ ○ とほなげ

和名抄 宗介 遠射 (ト) とゝのふ とゝのへるも とゝのひ 万葉々 能信

調、整 (リ) とりぐひ 和 等利久比 農具之 耒棟

(チ) とをよるか 万 騰遠依 撓依の 義之 (ラ) とらはれ 紀

縛を訓り (ウ) とうしみ 和 度宇之美 燈心の 燈之 義之 ○ とき

うく 催止字々々 風俗哥 遂 ○ とゞろく 源 燈 義の 義之 ○

ときうぐう 宋 春宮を訓り 文 東宮とも かきゆも (フ) とふらひ 義 とふらふ とふらへ

とふらへるも 訪 (コ) とこしへ 紀 等虚辞 陪 長 ○ ときは

ときは 仏足石哥 加已力波 常磐 (キ) ときじく 万 時 久 自

非時 (ミ) としのを 万 年緒を 訓り ○ としごみ

多國をと訓り (モ) とものを 万 伴雄を 訓り ○ とも

なれ ともなはん ともなふ ともなへるも 之 共奈比 伴 ○ ともづな

和名抄 都奈 纜

五云

(ホ) とほつおや 和名抄 保乎 於夜 高祖父 ○ とほ[illegible]

ら 万葉 帯を訓り 之しも 義に訓るの義之 ○ とほつのみ 万 遠祢 を訓り

考に人倫に遠く祢に あくだ義にいへり ○ とほきろし 万葉 保志 呂之 樹に祢代 紀をあげく

大小魚をとるしるくはよめをと訓り万ヽ河宇保志呂之とよめるハ河の大なるをいふといへるハ鳥のをこしのあるを宇称へきろしハ解ヽといへるおほくいちしるくあきやのかる縁ハ合り文大のみをを往しらるも非えされよおのれハふるのしられなのんを考へき ○とほ川

ひなゝ 万等保為 杣比字 考ヽ去らく有ゝてくる 人をいふとえ ○とほぢの宮

万遠放 遠離 ㊦ とびたほる 万等騰巳 保里 滞

㊇ とりはぐ貴 万等利為々 役 取儐 ○ とりの

ふえ 和鳥乃 布江 吭 ○ とりのわき 和鳥乃 和多 腕脛

○ とりあへず 徒不取敢 の義 ○ とりかよふ 紀鳥往来 杣を訓り

○ とりはへる 古取塞を 訓り ○ とりじもの 万鳥自 杣

物鴨自物の まくらく ○ とりあはせ 和力利阿 波世 闘鶏

㊁ とらへびと 和力良倍 比力 囚人 ㊂ とをしなへ

長とこしへ にし ○ とこなめつら 紀永久を訓り常 万 蘂の義え

○ ところはぐみ 多労疲を訓り 万ヽ草はらとえ ○ ところはづ 古

登古呂 豆良 薢蕷 ○ ところじもの 万 杣物 ○ と

たのへり 多履物を 訓り ㊉ ともしはづ 万乏嬬 乏ハ芝 称そ

妻を愛しいふとえ

古言

㊍ とほみのかど 万等保乃 朝庭 解ヽ遠國々の府文ふ國そハ 大宰府なとをいへりとえ

○ とほつあふみ 万等保為安布美 和止保太阿不三 遠江 ○ とほ

七言　八言

ちふるひ 東 あを待 ○ ちはやぶる 源 あを山柁 延喜式

㊀ ちのいはほろ 多 [illegible]廬を 訓 ㊥ ちはやぶるかさは

古 常磐堅磐を 訓 ㊁ ちよみすゑまつ 万 跡見居 解て 鳥

歓の跡ある人を ふみみるか

七言

㊄ ちかきまもりみえ 千年返しの千の松の枕詞 百年二度に咲ともの ㊁ ちとし

ちはやぶるかみ 紀 新年[illegible]を 訓

八言

○ ちかはのぬしとしへぬれ 和 万葉 之間止里 鶺鴒

ち之部

二言　三言

ち乃部

二言

㊧ ちへ 拾 千重の 義也 ㊥ ちぐ 古今 千の数く 葉は下の ちるの絵ともなし

千々とも云 何しともなり ㊒ ちぢ 和 和名 同幡 和頸 ㊦ ちる 菜を

軸の 末也 ㊤ ちえ 丈子枝の 義也 ㊤ ちゐ 宇 智恵

㊇ ちは 源 帙 貧を 訓す

三言

㊄ ちはひ 万 千羽日 幸 さきはひの 略なり ○ ちはや 和

紀波夜 禪 ㋠ ちぐむ 多編を訓す ○ ちぐく 正
齷齪 ㋻ ちわ哉 古紀和彼 道別の賤統く ㋕ ちかふ
ちゝはんちのひ字紀か ちのへ不る布 誓 ○ ちかふ 栄 違 たかのふ道
たちまち ㋵ ちよう 栄 徴の事之 ほし 又凋寵 ㋶ ち
らふ 万 散相いふ 散を近 ㋒ ちうや 平家 事之 晝夜の
㋨ ちのわ 史 蓐乃綿 被の事之 そ ㋔ ちなも 和紀母旅
乳母 ㋳ ちやう 聴帳町頂挨 ともかれはし ㋯ ちしほ
史 千塩まて ハしほのあと ㋲ ぢもく 公 除目の訓例く
比云

㋷ ちりひぢ 和紀利比治 塵土 ○ ちりかふ 古今
散亂の約緩く ちりの約ふそ ○ ちりぼひ 源 散てほひハ助辞 ㋕ ち
かけく 万紀可是久 逝着 ㋳ ちやうじ 之 停止の事之
○ ちやうし 之 長子の音之 ㋶ ちちへふ 万紀良敝流
散を治し いふそ ㋙ ちおほひ 栄 兜生の事之 ㋪ ちひさ
し 和て小縣を紀比佐かちと云 小
五云
㋩ ちはやぶる 古紀波夜比史流 紀て残賊又強暴をも訓す 穢ハ威の為なるとし
㋠ ぢはくぶ 和紀々波久留 癒腫 ○ ちぐかふ 和

六云

ゑ々か布里 魚之 鱅 ㋕ ちからがは ゑ々賀良 加波 馬息之 逆
覩 ㋨ ちのやかひ ゑ々乃夜 万比 痔 ㋳ ちやう
しよ 叢 廳 許の 巻之 ㋓ ぢゆうごい 文 童 代の 巻之
○ ちゆうかう 甲陽軍鑑 忠孝の 巻之 ○ ちゆうば
川 々 誅 伐の 巻之 ㋪ ちひさのづ ゑ々比佐加多 伝渋 小
縣
六云
㋠ ぢのもぐさ ゑ々乃波久佐 草之 紫 参 ㋕ ちこの
川あふ之 ゑ々加津阿不三 國之 近 江 ㋓ ちゆう志ゞや

里之部

七云　二云　三云

う 蔵 中将 ㋪ ちひさ志やうけ ゑ々比佐木 古分 苔之 石衣
七云
㋐ ちあへ乃まつり 延 道 饗 祭を ㋖ ち志やう里
かうふつ ゑ々波利加宇 不利 幗
り乃ぶ 利 唎 利 黎 犂 里 理 離 隣
二云
㋒ りう 柳留流比巻 こりうし ㋫ りふ 粒 立 此巻 こなりうし
三云

四云

ヨ まよう 古 龍の毛

ヤ まやう 良雨量涼令 靈領

字借し

四云

ウ まうち わ利 字古字 林檎 ○ まうち

む 古今 膽の

六云

ヨ まようでん 殿 禁中殿

ぬの部

ぬの部 奴怒努農濃

二云

エ ぬえ 古 奴延和曰 鵺、鵼

字奴布 縫

フ ぬふ

三云

ナ ぬなは 字奴奈波 蓴

ヨ ぬおふ

四云

ハ ぬはのや 天

カ ぬかのほく 和叩頭虫 奴加豆支

五云

常之よえ 額着 ⑦ ぬ乃おび 和奴乃於比 白布帯

五云

⑧ ぬはりぐち 和沼波利久佐 草之 王孫 ㊁ ぬえぐち 古奴延久佐能 考ニ萎草の簍とえ なぬのまくり ㊀ ぬ蓍このふ里 和沼木加布利 機るもえ 縄車 ㊋ ぬすまはれ 空 被盗 を延えり

八云

八云

○ ぬひどのゝつかさ 和奴比止乃々夏か佐 縫殿寮

る

をのゐ 男雄尾小備 考 いづれもをの假字之

二云

二云

⑧ をば 和字手波 伯母、叔母、姨母 ㊄ を乀 万を 敝

をふるも 竟 ○ を乀 和乎倍 掠洋 雄家 ㊅ をち 万遠知

遠 ○ をち 万遠知 宜長云をちとは物のかへるをいふて鷹乃長哥に放れしをちかへりきと云鷹の

かへりあるをいふ中昔よりほとゝぎすのうたにをちかへりなくとよめり

なくともかへりいふまことかへるかなくといへるなり ○ をぢ

伜烏賊 老翁 ○ をぢ 字手比 伯父 ○ をち

和字知 郎若之 草蔓 ㋷ をり 万乎利 折 ○ を

わ 紀節文度を訓り ○ をま 多梏を訓り 鈴牛馬之
㋩ をふ 万乎流 居 ㋚ をく 紀誠々 應聲之 唯々
㋕ をか 古表加 丘、岡 ㋟ をさ 先 小田の義之 ○
をさ 和乎多 越前 少名 ㋡ をそ 和乎曽 獺
㋤ をな 万乎那 小谷 今田畑にうねといふ又小谷の事也又山のふところにうねりたる所をいふなれば小谷の義なるべし
乎 ㋨ を乃 和乎能 斧 ㋔ を杼 和乎 和泉 呼
嗽 枡に呼嗽の二字あり呼のかなはをと書き又呼嗽と有いかなる字にや注をくはしく考へ得ず額のみえず嗽をしらざるなり八雲にはをそとある
と例なりけはわかれ大隅國郡名噌嗽を曾於とあるをもて考ふれば嗽の字にあたれば枡の説は誤なり ㋗ をく
万呼文解に其海を指呼ととりたるなり ㋘ をけ 和乎計 手器之 桶

○ をけ 万表家 麻笥 ㋙ をさ 古表許 鳴呼 字 今読
をさなきなし なからへす ㋓ をえ 古表延 瘼 ㋚ をち
乎佐 棧なり 箴 ○ をさ 万乎佐 長 ○ をち 多
通事を訓す正に沙汰ある又は譯語をいへり韓語又訳語といへり ㋖ をぎ 和 万乎伎 荻
○ をさ 紀指揮を訓す ㋯ をみ 和乎美 信濃 麻績
○ をみ 拾小忌の略語之 ㋯ をし 紀表勢 食 ○
をし 和乎之 鳥之 鴛鴦 ㋓ をゑ 和乎恵 阿波 麻
殖 ㋪ をひ 和乎比 兄弟之 甥 ㋦ をん 万小篆を訓す

三之

㋺ をろち 古袁呂知 蛇 ㋩ をばな 万乎波奈

尾花 ◯ をはり 万乎波里 終 ◯ をはり 和乎波

里 國之 尾張 ㊁ をにふ 和乎迩布 若狭 遠敷 ㋭ を

ほね 和乎保祢 尾株 ㊦ をとり 和乎度利 媒

鳥 注少養雛子至長押人能招引野雛也云々 ◯ をのこ 古遠乃古 和にをのこ 男

◯ をとめ 古袁登賣 少女 ◯ をどり 和乎土里

雄 ◯ をどり 万乎杼里 躍 ㋚ ををり 万乎烏

利 花の咲撓もといふ ◯ ををし 万乎志 男雄々志の義く

㋕ をかされ 万犯又侵を訓り 案に犯略の義なるへしといへ ◯ をかの

ひ 万乎か岡方の 彼義く ◯ をがむ 紀烏呂餓弥 拜、竊をろ

このみの略語之葉之枦 カミ 尾の義よといへ ◯ をかし 宇阿奈乎 加之 可咲、可

賞 あかし乃ハ可咲をかし可賞をもかし又おかしの方ハおむかしの

賞方ハいふ後の転りなれハかなれとかくもあるへしおかしハおむかしの略

といへるも宗之偉慶を於毛加志とあれハいとゝのはなしなりのしもは

らかれと古事之於加之とあるをなりけれハひたく信濃漫録にふ

ふく後のとのなの情経日紀をも引おけあるへくもよしあるへく

㋞ をそろ 万乎曾呂 さきハおそろしといふことよりのおくちて

もかなるの文係をせし揃合をみてあるへし

ものなきふの沸りくさいちもと称くなるをかとおけなく万於保乎見杼里

乃乎ちハ今にいふそこのすむのこゝに深りてよくへれ精しからん於

保乎曾杼里をもなるも鶴のるもし略りてをさくなく袮杼里ヨリ又をなる

泪の中 ナカラ ならすのみをハ略して常に近き野山のちなりて物を濡す

溝をを川よりへしこの先にこそかくれハこのなにおふ

とハ今さしれなむ法くこ今をなるかしよりも則わか何かなるをと恐

怖のこゝろにおそるゝ八 似ることおそくはをそくの意なり

ⓤ をうと 和字宇止 夫 男人の名之字の字不止といへり 古本使馬にて麗人をも古末字土といへ

かれを和の方にしくのひね ○ をうさ 和字宇多 伊勢 麻績 ○ をうな 和字宇奈 信濃 小内 ○ をうれ 和字宇礼 信濃 小谷

(ツ) をつゝ 万字都々 現 今うつゝといへり

(ノ) をのへ 新古万に岑上を訓り (ク) をぐき 万字具奇

解之小袖といへり ○ をぐな 紀 島県 童男 ○ をぐ

川 和字久川 麻鞋 (ヤ) をやみ 後撰 小止そる なりといへり ○

をやれ 紀 毒害を訓り 瘴の義とてやえるなり (ケ) をけら 字宇今良 草之

朮 (フ) をふさ 先 虹の乳 ... 字

未考 ○ をふさ 和字布佐 尾間夾之 鞦 (コ) をこぶね 舂

栞に雄凝の義といへり ○ をこじ 字宇己自 魚之 䲢魚

(サ) をさむ 万字佐牟 治 納 同 ○ をさし 和字佐之 以竹貫魚也

鮫 ○ をさぎ うさぎなる 万字佐藝 兎 ○ をさなえ 和字佐

未 專 長女の義之 ○ をさだ 和字佐多 駿河 他田

(キ) をぎふ 支 荻生の義之 ○ をぎえ 万 招餌を訓り

(メ) をめく 清 叫 俗まかんくといへり 栞に喚めく義といへり (ミ) をみれ 古

哀矣 女 (シ) をしき 東 折敷といへり ○ をしへ 那

わに鵄鶚を刀支字之同土里といへ 数、海 ○ をしむ 万怨之矣 愛、惜

(モ) をものの 紀 粮をよめり 食物の異称也

ヒ云

(ハ) をばなわ 万 小放 解〻をふ発語とよめり (ト) をとゝひ

万字かな 前日 栞〻彼津日之中略 一昨日ハ俗語なとも見え ○ をとゝし 万葉 年

を訓りとよめし (チ) をちかた 古今 遠近 又 彼此 を訓り ○ を

ぢなし 紀 懦弱を訓り 栞〻無男道の義とも ○ をちづく

旧條を訓り 栞〻小路〻の義とも ○ をちかた 万 遠方を訓り

(リ) をりそへ 古今 節映の義也 ○ をりひめ 江

折櫃 ○ をりふし 伊 事字なき時 節を訓り (カ) をとが

はら 和名加波良 髄尾 ○ をかつら 和名加豆良 木之 楓

(タ) をたまき 史 麻手巻の義也 ○ をとけふ 紀 烏多

鶏盧 雄誥 (ソ) をそまし 伊 万〻於保乎曽土里のをそ〻ろしい世物語なども〻浅

ましく 憎ましきといふ へより浅きかたをそふべし (ム) をむなめ 和名宇奈米 妾 (ム) をと

むかひ 万 峯向を訓り (ノ) をのえ 和名乃々江 松

○ をのく 字鏡 乃々久 怙 (ク) をぐる 万 史

小車の義也 口なくともし (ヤ) をやなぎ 史 緒柳の義也 (ケ) をけを

乃 和名今毛乃 牡 (フ) をぶくろ 和名尾袋 尾鞴

○ をぶれ 万 和名乎支須万 武義 男衾 (サ) をさく

五言

万 宇佐々々 専 ◯ をさかり 万 壮士時を 訓り ◯ をさ

なし 紀 不肖 文不敏を訓り 撲々長の義なり ㋖ をさむし 和

宇波曽之 今文取者なり 蚊蠖 ◯ をさなは 鷹の異名 禁々招索の義 くしなん

㋥ をしもの 紀 飲食を 訓り ◯ をしがは 和宇之

加波 柔皮之 韋 ㋝ をせなの源 紀々背見を をせなと訓り 正々 [illegible]のかくる [illegible]をせむしと

いふなるへかれハ背の ちくかる [illegible] なるへん ㋜ をちぐに 万 食國を 訓り

五言

㋩ をばなのゆ 康富記 [illegible]の黒焼を [illegible] 早稲の [illegible]

◯ をはせがつ 法 男茎形を訓り 禁々陽元形の義なり ㋣ をふく

六言

◯ くし 和 宇力 力宇 力之草之 赤龍 ㋕ をのもじを 和

宇加土々役 草之 苻蓖 ◯ をかさくし [illegible] 和宇加良々之 菌

芋 ㋚ をちくし 紀 明直を訓り 長々浦の義之 ㋦ をちみだい

ろとき 訓り 小居衣を ◯ をみなへし 和宇女奈 敝之 娘

郎 志女郎花 とも ㋦ をしもくさ 史 杉 [illegible]草の 義なるべし

六言

㋺ をろちの川を 万 宇呂乃波 略字 山高々なり ㋩ をは

しちふれ 史 尾羽打振の 義なるべし ㋣ をちのはしら 和宇 力

古柱 橋梁之左右之柱之 幢柄 ㋕ をかたまのき 古今 禁々賢 本をとと

七云　九云

にへる椙榓の木なるべしといへり又貴宴の哥に西柏をのそり此木のかく
うるき柿のえもるまゝなくはかの丸とへかれハ一木にハかるのそのその

㊈ をのこじもの 万雄自物を 訓り ㊅ をとこもしの

も 万宇良毛許 彼面此面 乃母 の哥之

七云

㊉ をちかへりなく 二云のをちこちにいへり ㊈ をのしかん

なぎ 和宇乃古加 年奈伎 覡 ㊇ をとむすめのさ 和

宇佐年留 ぬ加佐 治部省

九云

○ をさめのつかさ 和宇佐米乃久 留ぬ加佐 修理職

二云　三云

わ乃為 和倭王涜 音之 廻輪丸 訓之

二云

○ わゑ 延和恵 葉に弱来の哥之とも

三云

㋺ わけ 吏 万ろもえ葉に衣の袖れて海松なりの 衣かそへなしくる剖れたるをいふそうり ㋕ わ

かえ 万若益を 訓り ㋡ わゐかの 拾 分来の哥ゐ 葉に吾柄の 哥えともふしくるるをいふなり

総 ○ わけす 万和豆町 之良受 葉にわ小助分の哥とへ解に 分着の哥之といふなり

㋶ わらは 字和良 波 童 ○ わらふ もろもろ 子ひ

字和良 布 笑ひ咲 ㋒ わらじ 塗 皇子の 哥之

(キ) わぎへ 古和役 散 吾家 (ミ) わじき 和名 役之

土佐 和食

ゐ云

(イ) わいため 紀 別を訓り (ワ) わらは 万和名 良葉

栞に未完ふの柔らかなるをそれとよへりとぞ 解くもとりまとねしとりふ六しひるぞ (カ) わのうなぎ 伊勢人の家之

(タ) わらふ 万 渡相 後るを延 いへるぞ (ル) わさびみ 紀和 多

和名 海神をいふめりやそ 海をもいへり 少童 (ル) わさび 和名 古 比草之

薪智 和名 木天蓼 かれけし (ル) わさらひ 和名 多良比 伊勢 度會

(ツ) わびらひ あわれをもいひそふ 万和名 良比 煩

(ラ) わらはべ 和名 良波倍 童男女之 侲子 (ル) わらふぐ 和名 草鞋を訓り 和名 布古 圓座 (ル) わらうづ 今 草鞋を訓り 和名 橋を

和良久里よえうく 通へいふれぬけし (ク) わくらば 万 邂逅を訓り はふ 漏りて訓し

(ル) わくのえ 和名 和久 乃江 梔 (サ) わちはひ 之 安比 禍

栞 不正 かれけし (ル) わぢちき 紀 俳優を 訓り 栞に態招の 家鏡へしとぞ

(キ) わきまへ ことまゐとる 辨 分踊の 意り

ゑ云

(カ) わのびへり 万 若返を 訓り (レ) われもかう 吏 正うな けし

古今 未考 (ラ) わらはやみ 和名 和良波夜美 二日一發病之 瘧 (ウ) わう

かゝ部 二云 七云 六云

もやう 名 王織の ○ わうぎやう 色 横行の 巻之

㋑ わうんがひ かひ 万忘貝 一行る見ゝあるきる名し

六云

○ わせんしやう 守 わ先生乃人を引てらう細え わせうあしおらうそ

七云

○ わさほのかげら 万早穂乃蘰を よるり

かゝ部 二云

加賀嘉迦伽可河何荷珂柯舸軻訶歌 甘閒箇價 賀 村俄蛾峨餓鵝雅

㋑ かい わか伊 櫂 ○ かい わかい 腹中虫之 蛕

㋩ かは 万加波 河、川 ○ かは わかは 皮

㋭ かほ わかほ 加保波世 顔面を 顔、面 ㋬ かへ わか倍 木ノ子 榧子

○ かへ わかへ 木之 栢 ○ かへ かへるる 万可倍 替

㋠ かぢ わか治 木綿木之 穀 ○ かぢ わか治 舟ノ名之 楫 ○

かぢ かぢの略 鍛工 ○ かぢ 名

加持の 巻之 ㋫ かふ かうへるる 字加布 買 ㋪ かひ

古加比 貝 ○ かひ 古加比 山間之 峡 ○ かひ わか比 稲穂之

頴 ○ かひ 字加比 蛺 ○ かひ かへるる 古加比

飼、養 ○かひ 和加比 食器之 匙 ○かひ 古今

かひるかひなしなるゝ身ぞ 梁之䊔よりおちる なるくし論のもめうゑとらしのとん ○かひ 和加比

國之 甲斐 ㋜ かぞ 万加受 數

云云

㋑ かいし 字加伊志 鵼 ○かいな 和加伊奈 染草之 黄草

㋩ かはち 和加波知 麪之 醐 ○かはら 和加波良 尾

㋭ かはぢ 字皮 彼の肴之 皮二そゑおもう ○かはぞ 万加波度 河

内 ○かはし 万加波須 交 ○かはら 紀河良を訓り

○ かはべ 字加波弁 肌 ○かはづ 万河津 蛙

○かはや 和加波夜 厠 ○かはな 和加波奈 ○菜之

手笞 ○かはら 紀加波良 甲 ○かはる 貴宴之

可波留 替、更 ○かはわ 和加波 伊勢和 河曲 ○か

はひ 和加波比 越前 川合 ○かはし 和加波志 肥後

合志 ㊁ かなは 和加仁波 本之 樺 ㋬ かへち 後拾

綱るさの思ひ待をまなるそうし ○かへふ 万可留 散 佩 ○か

へふ 万覆又返を訓り ○かへる 和加閉流 虫之 蝦蟇

○かへる 和加閉流 鷹鶴二年色 鴾 ○かへふ 和加倍流 卵化之

孵 ○かへで 和加閉天 本之 鶏頭樹 ○かへる 和

加倍留 越前 鹿蒜 ㊦ かへる 後撰 字に法をかえ止不とらん 是え今かへるのみと

以八牡 鴾りえ ㊟ かほり 万可里 保 觚盧 ○ かわふ 文

荊生の 翁え ㊘ かをる 字可守 留 薫 ㋻ かわく

字可和 え 乾 ㋕ かへ 仆 かくふる事也 抱を訓り 栞に合抱の翁えよらん ○

かゞひ 万 耀歌を訓り 栞にかけあふの翁えてけあの女かよふる文 常陸風土記に筑波山の祭日に男女集会

しわ于残絡をもし婦をかへん をかひとらふとえるり ㋵ かよふ かよはん かよひ 万 かよく る事

可欲 布 通 ㋟ かよは 兄 兵庁ねるり出る词なるへし 源 氏物語文に世物語毎にえんえるらんに

よのせぬとも文えるくまよりいまるにを為治右ると人の所の具せぬとくたく

くえ不非え甚ふ路のるをりげなるしすくとも似るるるをりまとけるきると

今まくし ○ かわ 源 車の行帰よりわるる詞なるへし 緑あく 演繁露に云晴人是え不具をいふらん文

ひ わかれ比 かれえひとも 王餘魚 ㋞ かぞへ 万可藴倍 うぞふる事 數

倚 鉄をも訓り 砕え集にも 車にてもかけふとらん ○ かへ 丈 傍を訓り 方 の翁え

○ かくえ 万 片枝を 訓り ○ かゐ わか多 爲 兄 児

亟て傍居の 翁とら事 ㋹ かれひ 万可比 御 餉 乾飯の 略語え ○ かれ

㋡ かづく 拾 被を訓り かづけ物に りし ○ かづ 齒 古

かと 役 潜 ○ かづち 字 かと 和 銜 ○ かづら 和

か是注 鬘少者所以被 助甚鬘之 良 髲 ○ かづら 古 かと良 蔓草之 葛

㋤ かなひ かれもん かなふ 万可奈 比 かなへるも 適、合、叶 ○ かな

へ 字加奈 返 鑼 ○ かなふ わかな布 筑前 金生

㋻からえ 和加良衣 草麻 ㋒かうし 栄松子の事

依く ○かうじ 源 字に甘橘をかう志と云之かうし八 事依之今柑子也 又柑王篇姑南切橘属也

○かうべ 和加宇倍 首 上方の義也 ○かうち 和に鞠をかうと云

○かうい 源 事也 更衣の 漢書更衣 注に為休息

事依略解也 正にかんたちめ殿上人也 殿上人也 とを事依になりなきものといへり

易衣之處亦置宮人也 皇國 更衣始於 仁明天皇矣 ㋨かのえ 庚 金の兄の 義也

㋳かやゐ 位 高陽院の 讀例也 ㋮かまへ 源 栄 構を訓り

○かまふ 字 加万不 大声也 𥢤 ○かまふ 和加万不 江 蒲生

㋘かけぢ 先 磯道の 義也 ㋫かふち 和加布知 國也 河内

○かふが 紀 鹿深 江 甲賀 ㋙かたふ かたふん かたへ かたひ

全 圍 恒 羅の約なり きかおの約也 ㋖かきは 拾 堅磐 ○かき

へ 和加支倍 驛 高家 ㋯かしひ 和加之比 本也 橡 ○

かしは 和加之波 本也 槲 ○かしを 和加之乎 淡路 賀

集 ○かしひ 和加之比 筑前 香椎 ㋪かひた 和加比

古 万にかふと 蠶 ○かひな 字加比 宗 肱、肘 ○かひた

和加比古 卵 ㋲かもえ 和加毛衣 鴨柄

比云

㋑かいまみ 紀 覗私屏を訓り 新間見の義也 ○かいがや 和加以 加也

上野 桂萱 ○かいとり 檜 飯の 義也 ○かいとり

源檜練の義也 ○かいがね 和加伊加祢 肩下也 胛

㊇かはごめ 和加波加米 竈 ○かはむし 和加波

学之 烏毛虫 ○かはほね 和加波保祢 为草之 骨蓬

○かはほり 和加波保利 蝙蝠 かはとりとも見え 從の轉り也 ○かは

たけ 和加波多計 箬 ○かはなみ 字加波奈弥 草之 白礬

石 ○かはぢち 字河佐知 賣子木 ○かはらふ 万

變布 變るを延いへり ○かはらけ 字土器を訓り 瓦器の義也 ○か

はゆし 徒面映しの略語なり ○かはらの 源湖月おとさは やのとりとも見ゆる

ぬくし ㊅かほばせ 和加保波世 顔面 ○かほばれ 万

貌花を訓り かほ花の名の今にくし ○かほどり 万 容鳥を訓り

解に呉鳥 云呼子鳥 一名なりんと見え又このほかは槿花なりんといへりしとるえろくるの花の説に槿花はあさがほとも見ゆる

かほばくれと呼子鳥かかるふるあるくらうおもそれ又古今

ゆかしさを接て紀 貌麗をかほよしと訓りかれも誤り也

うるさしあるもよくほめてかほよりこのほそれといふかなかんれ又

かほそれこのほとりはかほよし云の花の略語とよそれほれ

○かほのり 丈むすひ様ましくら名のかほのりは 未考 字

㊄かつらみ 万返見 顧 ○かへらひ 万還比

ゆるを延いへり ○かへなし 丈ある人の免をゆるむるかへなしのよそひの程よきまあけすける

未考 字 ㊁かちじみ 和加知須美 和炭 ○かちどり

和加知力利 檝師 ○かぢのき 字加知乃木 木之 楮

ⓡ かりぐひ 古苅杙 枯杙の義之 ○ かりしほ 丈
苅時を潮の節に遠ちねをもてなぞらへいへるなり ⓝ かるいし 和加留以之 浮
石 ⓚ かぐらひ 万迦比 解にかがひに同じといへ ○ かぐよふ
万加我欲布 かがやくに同じ ○ かがなへ 古加賀那倍 考
ⓨ かくはら 蔭傍を訓り 片腹よりいへる成べし ○ かくしハ
紀 堅磐を訓り かたしはなり ○ かくらひ 万可多良比 語を延いへり
○ かくはむ 万加多波牟 解にかたふに同じ かたまりの意ともいへ ○ かくしほ
万 堅塩 今塩なるぬを塩といふをこれと 古くハ堅塩といへり ⓡ かれひけ 和加礼
比計 標子 餉箭の義之 ○ かれいひ 多 餉を訓り

ⓣ かづのき 万可頭乃木 解に穀の木なりといへり ○ かづくる
所被の義之 ○ かづらく 万可頭良久 喜字未考 ○ かづきめ
和加豆伎米 潜女 ○ かづらき 古可頭良紀 大和 葛城
ⓝ かなづゑ 和加奈都恵 鐵杖 ○ かなづる き 擯を
訓り 倍ハれてをるところ ○ かなふべ 源氏を訓り 不假の義之 ○
かなしひ 万可奈之悲 ⓡ からさを 和加良佐乎 村穀具之
連枷 ○ からちぎ 神楽 体源抄に枯荻之文枯らる荻を持年ずゆれと実にハから咲樂
とからハ神懸りの時須くる事の意ハをろくからハ着く例の事ハかくてをろくも文をまハをのしまてかしの紛まし神を祭る故事なり古事記
古紀咲樂の ○ からある 万韓藍 ○ からほひ 字

加良保比 萵草 ○ からむし 字 加良牟自 菜 ○ か
らふ 盛 懸 合の略 也 なるべし ウ かうがい 禁 加字加伊 髪掻
のをを 役之 ○ かうぶり 和加字布利 冠 ○ かうしん
栄 庚申の をを之 ○ かうのう を 功能の をを之 ○ かうけ
ち 今 纐纈の をを之 くゝり染をいふなり ○ かうばし 字 髪際の をを役之 ○ か
うやく 拾 膏薬の をを之 ○ かうらん 巣 高欄の をを之
ク かくろふ 万 隠合 隠 を延 いふなり ○ かくらふ 万 可吉佐布
かくるゝを 延いふなり ○ かくなは 此云かくのあわと いふなりも今 延し ○ かぐは
し 紀 加愚波志 馨 今かうばしと いふなり ケ かまど 和加万之々

竈 ○ かまどの 和加万 都加 桐 ○ かまどの 和可未
之 加急之 鰺 ケ かけなは 和加介奈波 馬取縄之 罥索 ○
かけらふ 万 翔 翔を延 いふなり ○ かげろひ 新古 隠を
延云 り ○ かげろふ 和加介呂布 虫之 蜻蛉 フ かふちめ
ま 河内女 まて 維波 ぬのなと サ かざらひ 万 飾 氷 錺 をのいふなり
○ かざを 紀 風 拓 拓を和り 拓を二云出せり キ かざろひ 古
可爇 漏肥 火 敦文 日の字 遊糸なるをいふなり ミ かみなり 和加美旅豆 霹靂
ミ かしは 作 栢之 恐仕の 佐 略也とをいふなり ユ かゆば 粥 清 粥杖
正月十五日粥を煑たる木を削りて杖とし子なき女の腰をうてば かならず子うむといふなり 今もかゆ杖ひ祈くうり 歌れの

五云

(ヒ) かひろぐ 和加比路久 舩不安也 舺 ○ かひたちい 和加比多古

貝蛸 (セ) かせづゑ 和加勢都恵 鹿杖 (ス) かすがひ

字加須加比 録 ○ かずまへ 采 数への 義 數へ 略也 数への 略也

五云

(イ) かいつぶく 拾 鶯子鳥を訓り いさごのことなり ○ かいもちひ 徒

捨練餅の略語也 ○ かいたるき 史 捨ていゆきえ ゆるむなり ○ かいた

ぼち 祢禾 音おと 鳥案おこ 塩醤也 とふんとなり ○ かいなふり 多 鶺鴒 を訓り

(ハ) かはやなぎ 和加波夜奈支 水楊 ○ かはらふぢ 和

加波良布知 葛萊 ○ かはしぐれ 字加波之久佐 蔺草

(ヘ) かはねぐさ 和加波祢久佐 草也 女青 ○ かはみどり

多師子矣を訓り ○ かはのかみ 和加波乃加美 河伯 川神也

○ かはごろも 和加波古路毛 裘 ○ かはびらき 字

加波比良古 蝶、蚨 ○ かはおろし 史 山おろしの よひなりんう

(ホ) かほよきな 史 かほよきはかほよし かほよしといふ 見合すべし (ヘ) かへ

るつ川 和加倍利字知 雑義也 擲倒 ○ かへりやみ 字

加戸利也弥 再病也 瘥 ○ かへんせん 紀 不背を訓り あらそふ

はのし を 句引を訓り 翠ぞかよふ 猿猴の… かよふと ○ かどのを (ト) かぞ

は 莫し 肴 智長を訓り 撿非違使 別当を附属とふもをいふ (又) かぬがぜく 万可奴 枕麻 気

久 志字 未考 ㋸ かるがゆゑに 故を訓り 斯在故の略語

㋕ かぢはらひ 源 梁て擬連の義とも 正て執筆を訓り ㋵ かよわあふ

丈かハ発語寄合なり ㋟ かこをなみ 万滷乎無 千滷のなきをいふなり

○ かこまよひ 丈 万で麗簡乱 和て紕を万欲布 とも注 絲節ふ調とも見え ○ かく

わるの兒 かくれて ○ かくのごとあり 先 和て撫鷹をかなとも兩見とも

○ かくがへ 佐藤 参差 方違の義之 ○ かくちはふ 紀

阿薫を訓り 梁に偏ちよふの義とも ○ かくはぶあり 和か伎不利 嶋

牛 ㋹ かれひはげ 和賀礼比 為 唐鞍之韉 ㋡ かぞい

ろは 先 左に文をかぞと訓 和に母をいろはとも ㋡ かげねぐはれ 和加気袮久

佐 草之 麻黄 ○ かげをむし 和加気辛 まくなふもの 蠛

蠓 ○ かげけるの 栄 緑を訓り 被物の義之 ㋤ かなはれ 為

和賀奈気奈為 梏槔 ○ かねはのあり 和賀奈都加利 刑 鐐

㋶ からかしは 和加良加之波 ともいふ 草麻 ○ からし

ゝ 大峯前の 伊吉作之 ㋰ かむはもあり 万神麻利 神集 略作之

㋒ からろよの 盛督殿の 吉作之 ○ からさやう 金剛強の

○ からしやう 高聲の 吉之 ㋺ かくみわわ 和加久乃阿和

结果 江家 ... かく縄 ... ㋘ かけばまひ 丈束を

牛て ... 馬ま ... ㋫ かぶらあり 和加布良恵利

鎶 (コ) かあじかの 枕 万 鹿児自物 あじかのあと (キ) かきつ
ゑぶ 万 可伎加 穢布 捲纂の 義之 (ミ) かみかげ乃 和加美度 分乃
國之 上野 ○ かみかぶち 和加美度不佐 國之 上總 ○
かきつばたの佐 和加美度 加佐 神祇官 (モ) かもじもの 万 枕
鴨自物 鹿児自物のあと

六会

(イ) かいさくろひ 玻璃 捲結の 寄佐 (ハ) かはらよもぎ 和
加波良 与毛技 白蒿 ○ かはらなでしこ かはらなでしこ 和加波良 与毛技 菊 ○
かはちさのき 和加波加 佐乃支 賣子木 ○ かはくじのみ

和加波々 之加美 呉茱萸 ○ かはらおもだか 長生を 訓す
○ かきつみぐれ 多土龍を 訓す (ニ) かなひ乃きれ 拾 かくいの
ふかけい うんか 去字 来考 (ヘ) かへるく 古今 返その 義之
(リ) かれ乃はのひ 万 雁使 穢武という人の 故事なるべし (カ) かくらは
しも 万 解き懸を延ふ 斷い有者しもなるべし (タ) かくしるく
ち 和加多之 呂之佐 三白草 ○ かきさけなし 續 可多
自兌 宗志 泰、辱 (ツ) かつをいろか 和加気宇 以呂利 堅魚
煎汁 (ラ) からななへか 和加良須 奈信利 轉筋 ○
からなあふぎ 和加良須 安布支 射干 ○ からかよこのは

多白膠を 訓リ ㋒ かうれゑふりを 香烟 ㋨ かの

わのぼ乃 和鹿乃和 加之乃 鹿茸 ㋘ かけ乃ふを 万

可鶏乃 金尾 ㋫ かぶらみゞび 和加布良 呂々須 白頸蚯蚓

㋯ かみおほしれ 和加良於 古之奈 若芙 ㋲ かもとふ

徐万鴨云舡

七云

㋩ かはら乃えだわ 和尾乃良 都里 欅 ○ かはらふぢ

乃岁 多鶏栖を 訓リ ○ かはくさぢら くそまゆくら 和加波之未 都々良

衛矛 ㋒ かうふりやなぎ 拾 柳の姿をもて いふなるべし

㋯ かしら乃かはら 和加之良乃 加波良 顱

八云

○ かうおしまれいひ 和加於加之波 乃以比 餐饋

手米杖　上終